



魔力＝価値の世界で契約したら、 6人の魔法使いに囲われました！？

目を開けるとそこは、一面の草原だった。
やや遠くに無数にある大樹はどこか無機質に見える。
澄んだ空気に混じる、鼻をつく焼け焦げるようなにおい。

ぼんやりかすむ目で瞬きしてみる。身体はといえば感覚がないところが多く、そのほかは鈍く痛む。

目を凝らすと、方々からもくもくと黒煙が上がっている。いくつか民家のよなものが見えるけれど、ほとんどが半壊していて、人影もない。

「ウウ……！いったッ…」

全身がズキズキと傷んで、自分で思うように動かせない。まるで死の淵から生き返ったみたいに。

ようやくピントの合いだした目をこらして、自分の手を見る。

（え…何？ 小さいし、爪も短い。おまけに日焼けしてる…？）

期せずして新たな身体の主になった私は、この可愛いらしい手の本当の主が消滅する以前、ユラ・ナリンと呼ばれていたことすら知らなかった。

ガキーン！ ガキン！！
ヒューーン、ドシュッ！ ヒュンッ！

ほんの数メートルの距離で誰かが戦っている。目に飛び込んできたのは、剣士風の服装をした若い男の人。

聖印が目立つ黒の法衣をまとい、目を血走らせてメイスを振り回す巨体を相手に、大きな剣を軽々と振りかざしている。

もう1人は…弓使い？スラッとした体軀から矢を連発し、身軽な動きをしている。

剣士風の人が複数の敵を相手にピンチになると、足もとの岩がせり上がり、防御壁になる。後方に控える、白いローブの男性が発動させているようだ。

しばらくすると、急に辺りが静まった。

「ねえっ、大丈夫——？助けに来たよ」

男の(?)人が、深刻そうな顔で声を掛けられた。

私は驚いて、ビクッ！となる。

短弓を手にしたその人は、チュニックを着ていて中性的な感じ。見ようによつては十代に見える。優しい桃色と金のオッドアイで、色素の薄いふわふわの髪。そして、耳は——

「う、ウサギ……！」

私の声に反応したのか、ふわふわのウサギ耳がぴょこん、と動いた。

「あは、もしかしてキミ、アタシのこと忘れちゃった？」

(からかわれて…る？コスプレじゃ、ないの)

何かを問うように震える手を伸ばそうとした私は、色々と限界が来て、また意識を手放してしまった。

「！ッ、危ない」

後ろに控えていた男の人が、サッとかけ寄るとユラの小柄な身体を抱きかかえる。

黒いストレートの髪を1つにまとめ、紺の騎士風の服装をしていて年齢は20代前半くらいに見える。

細身の身体に余るほどの大剣を背負っているが、動きは素早い。焦りをにじませながら声を張る。

「おい、ミハイル！ 急いで診てやれ」

「分かっているよ、ヴェルン」

ミハイル、と呼ばれた大柄で長身の男性は冷静な口調で応え、急ぎ足で近寄ってくる。

白いローブが風ではだけ、浅黒く引き締まった肌がのぞく。顔のつくりも、端正ながら異国のものだ。若々しく見えるけれど、30歳は超えていそうな落ち着きぶり。

カチャリ、と小さな音を立てて眼鏡を直し、手にしていた鞆から次々に器具を取り出した。

しばらくの間、ユラの目を開けさせライトをあてたり、胸にあてた器具で呼吸音を確認していたが、その表情は陰しい。

「……これは、屋敷に戻って装置を使って施術しないと。それでも助かる見込みは五分でしょう」

「え、そんな。かわいそう。急いで連れて帰りましょ。絶対に。ねえ、お願い」

うさぎ耳の人がひょこっ、と現れてユラのそばに膝をつき、その手を取る。うるうと目を潤ませた。

「俺も、バニに同意する。あとのことは屋敷の皆と相談しよう」

こめかみに手をやりながらヴェルンが言うと、ミハイルも頷いた。

* * *

レースカーテン越しに日の射す窓辺に掛けた私は、少し冷めたアールグレイのミルクティーを飲んでいる。

（美味しいし香りがいい、茶葉がいいのかな）

扉がコンコン、とノックされる音がした。

「……どうぞ」

「失礼…ああ、もういいの？ ベッドにいないで」

うさぎ耳の男の人が、少しだけ困ったような顔をして立っていた。少し折れた耳がピクリと小さく動く。

今朝から3回は部屋を訪ねてきて、そのたび世話を焼いてくれる。かなりマメな性格らしい。

私はあの草原で倒れて以来、この屋敷へ連れてこられて数日は眠っていたみたい。

私を助け出してくれた3人を含めて、お屋敷には6人も魔法使いがいるという。

「ねえ、ちょっとおしゃれしてみない？ 気持ちも少しは変わるかも」

「あ、はい。お願いします」

「もう～、可愛い。でも、そんなにかしこまらなくってもいいのよ。どれどれ、顔色がいいわね。それに、綺麗よ」

バニさんから綺麗、と言われて少しだけ胸がぼわんっと温くなる。そんなこと、言われ慣れてない。

慣れた手つきでサッと私の髪を手取る。少しゴワつきのある髪にシュッシュッと霧吹きをして、ブラッシングしていく。

髪を優しく梳かれる感じと、差し込む日差しが気持ちいい。

少しだけウトウトして、気が付けばバニの器用な手によるヘアセットが完了していた。

セミロングの明るいオリーブグリーンの髪には、サイドに細い三つ編み。

しっかり保湿したうえに、パウダータイプのファンデを薄く。眉の形を少し整えられ、うす桃色のリップを施されている。

「うん、いい仕上がりよ！ もとが良いからだわ。やっぱり美人さんよね！ ああ、そろそろ、お菓子も必要ね」

バニがパチン！と指を鳴らすと、ティーセットが用意されていた。

「うわあ…すごい！」

思わず感心する。バニさんは少しだけ照れたような仕草をしてから、給仕もしてくれた。

冷たいハーブティー、それに柑橘の香りがするフルーツのゼリーも、とても美味しかった。

「あの…私、何もお返しできなくて」

おずおず言うと、バニはニコツと笑って言ってくれた。

「ああ、ごめんなさいね！断りもなく。じつはもう返してもらってるの。ユラちゃんの髪、それにお顔を触らせてもらったでしょう？素敵な魔力にドキドキしちゃった♪」

「え、そう…なんですね」

「そうよ～、お肌のツヤまでよくなってきたかも～！」

ちょっと不思議な気がした。触れあうことで魔力を受け渡せるってこと？みたい。

（そういえば、首や肩もトントンしてもらったよね。ただ気持ちいい～って思ってた…）

翌日。身支度を整え、部屋で食事を済ませた私は、温室を案内された。

収穫作業をするらしいエミールさんが誘いに来てくれたから、行ってみることにした。

屋敷の建物を回り込んで、庭園を歩いた先に見えてくる白い鉄枠と円形のガラス張りの建物。ただ、そこには先客がいた。

「こんにちは。初めまして、ですね」

にこりと優しい笑顔を向けられ、ちょっとドギマギしてしまう。

ミハイルさんに並びそうな長身で、毛先に鮮やかなピンク色が入った毛量多めな長い髪。瞳には何とも言えない影…じゃなく深みを感じる。整った顔立ちに色白の肌で、男性だけれど美人という形容詞が似合う。襟元の開いたチュニックを着て手袋をしている。

（作業の途中だったのかな。植物のお世話をするなんていい人そう）

「アルノーさん。こちらだったんですか。ユラさん、この方はお屋敷の交渉役で、王立魔導化学研究所の専任研究者でもある、アルノーさんです」
「ユラです。アルノーさん、ですね。よろしくお願いします」

王立の研究機関の研究者……すごそうな人で、完全に気後れしそうになっていた。

アルノーさんは私の手を取り、少し屈んでからチュツと手の甲に軽く口づけをしてくる。それから、目をじっとのぞき込まれた。

「！？…ツ」

戸惑っていると、横からエミールさんが声を掛けてくれた。

「あ！ そうそう。ミハイルさんが探してましたよ」
「ふふ……わかった。ひと段落したらいくよ」

アルノーさんの視線を背中に感じながら、私はエミールさんと2人、温室を見て回る。

（中略）

「ユラさん。手を繋いでも、いいだろうか」

足を止め、少し顔を背けたヴェルンさんが、片手を差し伸べてくる。頬がほんの少し赤い気がした。

私は彼の手を取り、また歩き始める。大きな手は温かく、隣を歩いていると優しい風を感じて、なぜだか落ち着く。

樹皮が白い斑の木立の合間をぬうようにして公園をゆっくりと歩き、ベンチに腰掛けてポツポツと話をした。

「ヴェルンさん、お屋敷では何をして過ごしていますか？」

「そうだな…俺は、よく畑にいる。力仕事は剣の鍛錬も兼ねられるからな。いまは美味しいトマトが沢山実っているから、つい何個も食べてしまっってエミールに見つかるんだ」

「そうなんですね！トマト、私も食べてみようかな」

「俺が収穫して、あとで部屋に持っていこう。それと、エミールにトマト料理を頼んでみる」

食べ物やエミールさんの話ばかりで、意外なくらい笑わせてもらった。途中から、じわじわと面白い人だなあと思っていた。

お屋敷へ戻る道中、狼のような魔物たちが襲ってきた。

でも、ヴェルンさんがすぐに撃退してくれてホッとした。細身の体に似つかわしくない大剣に華麗にさばかれ、魔物は霧のように消えていった。

（ヴェルンさん、やっぱりすごい人だ…！）

私はひたすら彼の頼もしい姿に感激していた。

* * *

部屋に戻ってキスを何度も重ねたあと、ヴェルンが言った。私は小さくうなづく。

ヴェルンは私の首筋をつたってキスをする。そして、そうっと胸の間に顔をうずめた。

「あ、恥ずかしい…♡」

「いい匂いがする。それに、柔らかい…」

服越しにゆっくりと唇をあてられ、何とも言えない気分になる。

「んっ…… ふ♡う……！んっ」

胸のリボンがシュル、と解かれてヴェルンの手が服の下にそっと入ってくる。

下着越しにゆっくりと胸を持ち上げ、ふるふると揺らされる。そして、少しかたくなっている先端をつん、と指で探し当てられた。

「ひゃ♡だめ…」

「敏感なんだね、すごく可愛い」

またキスをする。温かな舌がそっと唇をつつくので、少しだけ口を開けると、ヴェルンの舌が優しく差し入れられた。

「ッ？んんう……♡」

「ああ、もしかしてこれも初めてか？驚かせて、すまない」

少し荒く息をつきながら、ヴェルンの手が私のお腹や太もみを伝っていく。大きくて温かい手に撫でられる感覚に反応してしまう。

「んっ…あ、はあっ♡♡」

「すごく可愛い…ユラ♡ここ、もうしっとりしてる」

「そんな、言わな…でえ♡」

よしよしするみたいに頭に片手を添えられ、そっと舌を絡める。

ヴェルンは、私の着ていた衣装や下着を1つずつ器用に取り去ってしまった。逆さまのお椀みたいな胸が、ふるんッ♡とあらわになる。

今度は舌で胸を舐めはじめた。円を描くようにしたと思ったら、尖らせた舌で先端を優しく跳ねるように舐め上げる。

ピチャッ、ペチュッ、ピチュ♡という水音が耳に届くと、恥ずかしさで喘いでしまった。

「はあ、はああ♡らめ…んっ、うん♡♡」

ヴェルンの手は、おまんこの小さな花ヒダを撫ぜ、秘裂の入り口に指を優しく当てて動かしている。少しずつ粘性のある水音がしてきて、私は二重の快感に襲われた。

「んっ♡、んあっ♡♡！そこ、らめ… ふううっ……♡！」

「綺麗だよ。ああ、本当に可愛い♡」

快感に支配された私は、何も考えられなかった。

「ユラ、大丈夫？……大丈夫そうだね♡♡」

「もっ、イジワル…… ああっ♡……んうう……！」

予想外の動きを続けるヴェルンの舌が、つぎつぎに快感を湧きあがらせる。

「あ、あんっ……ん～～っ！♡♡」

十分ほども舐め続けられて、私は喘ぎながら軽く絶頂していた。月明りの中、ビクンと身体をふるわせる私をうっすら笑いながらヴェルンが見つめて来て、すごくドキッとした。

それから舌での愛撫は続き、さらに指も秘裂の中に差し入れられてしまう。

「え、や…あッ！」

「ッ、すまない。痛いか」

「だいじょうぶ、でも…」

「いきなりは辛いかなって。少し、慣らしておこうかと思ったんだ」

「う、うん……わかった」

1度、抜かれた指がまたゆっくりと入ってくる。

チュクッ、チュブ……！♡又チュ、又チュ♡

「もう、すごく濡れてるね♡」

「やあ…♡」

衣服がこすれるような音がしていて、すぐに私のほうへ向き直ったヴェルンはキスをしながら私の足を開かせ、にじり寄ってくる。

「……入れるよ？辛いと思うから、少しだけ魔法をかけた」

きょんとしている、ヴェルンは耳元で囁いてくる。

「君を、感じさせやすくした」

「……！♡」

そう言うと、ヴェルンは自分のもので私の秘裂をタテになぞり始めた。愛液で塗れているそこは、にゆるにゆると滑って、もどかしい快感を生み出す。

「あ、あんツ……あ、う…♡♡」

「可愛い…ハグ、しよう？ユラ」

抱き合うと、少し体重がかかってヴェルンの大きなものの先端がにゅち♡と秘裂をこじ開けてきた。